

【用語】若水―元日の朝に初めて汲む水、一年の邪気を除くという家礼―家例、その家に代々伝わるしきたり、きまり さゝかし大根―大根を笹搔きにしたもの、笹かしは笹搔きの訛 輪マ―藁を輪の形に編み、数本の藁を垂らした正月の飾り物 精霊棚―盆に精霊を迎えるために設ける棚 濟米―齋米とさまい、寺に施す米 亥猪―亥の子の祝いのこと 満利支天―日本では武士の守り本尊とされた 事納め―農事終了の日、里芋・こんにゃく・ごぼうなどを加えたみそ汁をこしらえた 駒の爪―大根を馬蹄型に切ること 青銅―銭のこと、一疋は一〇文

【解説】川越藩松平家で二〇〇石取の中級武士である寒河江家は、七代の元清が文政元年（一八一八）前橋陣屋の町在奉行に着任した。元清は、赤字に悩む藩財政を立て直す一助として、前橋分領村々の復興のため力を尽くした。そのなかに勸農会所の創設、荒地として放置された田畑へ越後国から「雇人足」を導入し、藩の責任で年貢を徴収すること、あるいは「惣作地」の「用捨引」を解消して「本代地」とすることなどがあった。

それより以前の寛政十二年（一八〇〇）七月二十三日、元清が三十一歳の時、寒河江家に代々口伝として伝えられてきた年中行事を、子孫が少しも知らないのは本意でないとして筆をとり記録した。それがこの「年中之覚」である。内容は、書き出しに正月元日の様子が記されている。すなわち朝早く起きて若水を汲み、年末に伊勢から送ってきたお茶を入れて福茶をたて、家内揃って新年を祝った。雑煮は元日に食べるのみであるが、そのなかに青物、すなわち野菜を入れることはなかった。七日の七草粥のなかには、切り餅を入れて食するが、元日から今日まで野菜を使用することは先祖から堅く禁止されていた。十五日の小正月は小豆粥、そしてこの粥を煮立てるとき家じゅうの注連縄を竈で燃やした。三月の節句は菱餅、端午の節句は柏餅で祝った。七月はお盆、八月は月見、九月の節句には栗飯、そして十三夜の月見と続く。十二月八日は事納め、門松は立てず、表玄関と勝手口に注連飾りをするのみ、また年神の棚は作らなかつたとある。